

平成 24 年度 社会科研究委員会

1. 研究テーマ

人々の営みを追究する中で，社会的事象を自分とのかかわりであ
とらえ，社会的な見方・考え方を深めていく社会科学学習

2. 研究内容

(1) 公開研究授業

期日 平成 24 年 11 月 7 日(水)

授業学級 須坂小学校 4 年松組

授業者 藤澤隆之 教諭

指導者 信州大学教育学部教授 伏木久始先生

単元名 「須坂の発展に尽くした人々 越 寿三郎」

授業場面 学習問題「生糸の価格が下がって会社がつぶれそうになった時でも，工女
さんがよその製糸工場へ行かなかったのはどうしてだろう」について資料
やゲストティーチャー（以下 G T）の話や G T との対話をもとに，考えた
ことを話し合い，学習問題に対する自分の考えをまとめる。

(2) 研究内容

研究の視点を定め，子どもとつくる授業をめざして研究を進めてきた。

＜研究の視点＞

視点 1：調査・体験的な活動による，確かな事実認識のあり方

**視点 2：認識のズレを取り上げることによる，見方・考え方を深める学習問題設定のあ
り方**

視点 3：考えの類似や相違を明確にすることによる，予想の練り上げのあり方

【手だて 3－A】子どもたちの思考の類似と相違を明確にする指名（計画）。

【手だて 3－B】自分とのかかわりで心を寄せながらとらえることができる（考えが
ゆさぶられる）ための資料（調査結果等）の提示。

【手だて 3－C】子どもの意識をとらえた話し合いの方向づけ。

**視点 4：人々の営みを支えている思いや願いを具体的に考えることによる，見方・考え
方を深める検証場面のあり方**

【手だて 4－A】つける力にかかわった検証資料内容の吟味。（G T との打ち合わせ
を含めて）

【手だて 4－B】子どもたちの予想と G T の話や資料とをつなぎ子どもたちの追究の
意識を人々の思いや願いへと深めていく具体的な問い返し

【手だて 4－C】学習問題に立ち返り，最終的な自分の考えを再構成し伝えていく場
の設定。



〈めざす子どもの姿〉

社会的事象を自分とのかかわりであとらえ，人々の営みに心を寄せ，「すごいな」「あ
りがたいな」「よかったな」などの思いを持ち，人々の営みから自分のあり方を
考え，「私はこうしたい」「こうありたい」「〇〇はこうすべきだ」「〇〇はこうし
た方がいい」「本当は〇〇だったんだ」など，社会事象に対する見方・考え方を
とらえ直し，自分なりの判断を再構成し伝えていく。



人々の営みを追究する中で、社会的事象を自分とのかかわりでとらえ、社会的な見・考え方を深めていく子ども

3. 研究の成果

(1) 研究授業から明らかになったこと 授業の考察 成果と課題

・学習問題「生糸の価格が下がって会社がつぶれそうになった時でも、工女さんがよその製糸工場へ行かなかったのはどうしてだろう」について自分たちの予想を出し合い話し合う中で「工女さんの生活がどうだったか分かると理由もわかるのではないか」という見通しを持った子どもたちに対して、「当時の工女さんの生活の様子」の資料を提示することとした。この工女さんの生活の資料をみて自分の考えをまとめる場面では、当時の工女さんの生活の様子が分かることで、学習問題に対する考えが深まった面もあったのだが、一方で子どもたちの求める資料とずれがあったとも思われた。

資料提示のねらいとしては、資料から分かることと工女さんの生活の資料だけでは、分からないことをはっきりとさせ、それを明らかにするためにG Tに聞いてみようというようにつなげて行こうと考えた。しかし、資料の内容を読みとるのにやや苦勞してしまったことと、資料の内容が学習問題の解決に直接的につながるものでなかったことで、子どもたちの意識の流れと合わずに、その後のG Tの必要感を高めることにつながりにくくなってしまったと思われた。

・検証場面においてG T（須坂市博物館学芸員の中村さん）の話を聞いたり、教師が子どもの思いを拾い上げていたり、G Tから子どもたちに問いかけをして、それぞれの子どもが考えたり、つぶやいたりして意識していることと、必要としていることについてG Tがさらに話をするという構成にしたことで、子どもが当時の工女さんの生活や越寿三郎の思いや願いに寄り添いながら、自分なりの考えを再構成をすることにつながっていったと思われる。

ただ、時間配分の関係で、子どもたちが自分の考えを再構成する時間がやや不足してしまい、それを補おうとG Tが学習問題の解決に近いことを話してしまうことになってしまった。もっと子どもたちとG Tとの対話や関わりの深まりの中から、学習問題に対する自分の見方・考え方を深め、学習問題に対する自分なりの考えの再構成ができるようにしていくとが必要であったと思われる。

・G Tと子どもたちとの対話形式のかかわりを考える上で、教師の出や問い返しはどうであったらよいか。また、G Tとの話の調整(事前の打ち合わせ含む)など、資料の確かな事実認識のもと子どもたちが思考を深めていけるような工夫をさらに考えていきたい。

4. 来年度への課題

(1) 研究の成果から来年度の研究につなげる課題

今年度は、郡の研究課題と中心講師の伏木先生のご指導内容や視点に社会科の研究を重ねていくことをめざして、研究を進めてきた。来年度もこれまでの社会科の研究のテーマや研究の視点を深めていくことでいいのではないかと考える。研究の課題としては、以下の点を大切にしていきたい。

- ・調査、体験的な活動（学習体験）による確かな事実認識のあり方
- ・子どもたちの見方・考え方を深めるような学習問題や学習課題のあり方
- ・検証資料への必要感をもった関わり方（G Tとの関わり方を含む）
- ・人々の営みを支えている思いや願いへの関わり方（検証資料内容のあり方を含む）

(2) 研究推進や運営について

研究推進委員会は、回数や時間も限られており、研究を進めていくのは大変であるが、社会科としては、今年度のような体制でよいと思われる。